

認知的評価・感情喚起の個人差 —状況的測定ツールの作成—

名古屋大学大学院 山内星子

Individual Difference in Cognitive Appraisal and Emotion Elicitation: Development of Situational Questionnaire on Cognitive Appraisal and Emotion Elicitation

Nagoya University YAMAUCHI, Hoshiko

要 約

本研究の目的は、認知的評価理論の枠組みを援用し、感情喚起と、それに先行する認知的評価の個人差を測定するツールを開発することであった。開発する測定ツールは、①感情喚起および認知的評価を、より日常場面に近い形で測定できること、②集団実施が可能であることから、状況的質問票形式 (Situational Questionnaire) とした。状況的質問票形式は、場面を提示し、それを想像して回答してもらう形式である。大学生および聴講生 64 名 (男性 13 名, 女性 51 名) を対象に、30 場面を提示し、各場面で喚起される感情および認知的評価を自由記述で尋ねる質問紙調査を行った。この結果から、喚起される感情に個人差があらわれやすい 12 場面を選定し、各場面の典型的な認知的評価を抽出した。これをもとに、怒り、悲しみ、不安、喜び、恥、罪悪感の 6 つの感情喚起と、それに先行する認知的評価の個人差測定ツールの開発を行った。

【キー・ワード】感情喚起, 認知的評価, 個人差, 状況的質問票

問 題

はじめに

近年、感情に関する問題が社会的にとりあげられるようになった。例えば、“キレる”という言葉で表現されるような衝動的な怒りが挙げられる。これに関して、速水・丹羽 (2002) は、ベテラン教師に対する調査から、現代の中学生の怒り経験が増加していることを明らかにしている。また、うつや不安障害といった、臨床的援助を必要とする重篤な感情の障害は増加 (厚生労働省統計情報部, 2005), 若年化 (斉藤, 2007) の傾向にある。このようなネガティブ感情の突出は、人の適応やウェルビーイングを大きく阻害していると言えるだろう。一方、速水・丹羽 (2002) の調査では、ポジティブ感情である喜びは減少傾向にあることが明らかになった。それに加えて、喜びを感じる場面も変化しており、ゲームでの勝利や、他者の失敗に対する喜びが目立つという。つまり、健康的な喜びは

特に減少しているのである。近年隆盛を見せるポジティブ心理学の文脈においては、ポジティブ感情が人のウェルビーイングに大きく寄与するという知見が得られていることから (Fredrickson, 2005), その減少は人の適応や精神的健康に大きな影響を与えていると考えられる。これらの状況を鑑みれば、過度のネガティブ感情の抑制やポジティブ感情の促進を目的とした何らかの臨床的介入は急務と言えよう。しかしながら、感情喚起の個人差やその形成過程に関する研究は、近年大きな進展を見せていない。

認知的評価理論

効果的な臨床的アプローチを考える際には、結果として現れる問題のみに焦点をあてるのではなく、それに至るまでのプロセスについて検討する必要がある。例えば、子どもの学力の効果的な向上を考える際には、結果として出力される試験の得点を上げるのみでは十分でない。子どもが解答を導き出すプロセスを明らかにし、そこにアプローチしていくことが重要であろう。感情喚起に至るプロセスについては近年、感情は自己と事象の関連性に関する主観的な評価によって生じる、つまり、事象→認知的評価→感情というプロセスが存在するというコンセンサスが得られつつある (Scherer, 1999)。このような、感情の生起に認知的評価が先行するプロセスを仮定する理論を総称して、認知的評価理論と呼ぶ (Roseman & Smith, 2001)。近年では、認知的評価理論は、感情の生起プロセスに関する最も影響力のある理論の一つとされている (e.g. Scherer, Schorr, & Johnstone, 2001; van Dijk & Zeelenberg, 2002)。

認知的評価理論は、Arnold (1960) の先駆的な研究から始まった。その後認知的評価理論について詳細に記述した Lazarus (1993) は、認知的評価を二つに大別できるとしている。つまり、個別的评价要素と、中心的関係テーマである。前者はさらに、一次的評価と二次的评价に分けられる。一次的評価は、個人にとって当該事象が有意義なものであるか否か、そして有意義な場合には、それが個人にとって有益か有害か、という評価である。それに続く二次的评价は、事象への対処可能性に関する評価である。例えば、電車の時間が迫って急いでいる時に、道で誰かに話しかけられた場合には、“目的の電車に乗る”という目標に対し、大きくマイナスであるという一次的评价が下されるであろう。続いての二次的评价では、話しかけてきた相手がどのような人物かということや、話の内容が問題になってくる。つまり、それが部下や後輩であれば、話をさえぎって道を急ぐことができるが、目上の人物であった場合には、そのような対処の可能性は低くなるであろう。このように、ある事象に対する個別的评价要素は複数生じる。Lazarus (1991) は、これらの個別的评价要素が結びつき、中心的関係テーマが形成されるとしている。中心的関係テーマは、「適応を要する遭遇において、その関係によって生じる、中心的な害あるいは益で、特定の感情それぞれの根底にあるもの」と定義されており、各感情にはそれぞれに対応する中心的関係テーマが存在するという仮定がおかれている。例えば、怒りの中心関係テーマは“私と私のものを貶める攻撃”，喜びは“目標実現について進歩”，悲しみは“取り返しのつかない喪失”である。先述の例で言えば、話しかけてきた相手が上司であったために対処可能性が低く、電車を乗り遅れてしまった場合に“取り返しのつかない喪失”を体験し、悲しみが生起するかもしれない。あるいは、上司が意図的に話を長引かせていると評価されれば“私を貶め

る攻撃”であると捉えられ、怒りが湧いてくるかもしれない。このような認知的評価と特定の感情との結びつきは、Smith & Lazarus (1993) によって検証され、怒り、恐れ、不安などで強く支持されている。その他、多くの実証研究によって、種々の感情に結びつく認知的評価が明らかにされてきた (e. g. Roseman, Dhawan, Rettke, Naidu, & Thapa, 1995; Roseman, 1991; Reizenzein & Hofann, 1990)。

認知的評価スタイル

この認知的評価には比較的永続的な個人差が存在するとされており、認知的評価スタイルと呼ばれている (e. g. Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978; Lazarus, 1991; Root & Jenkins, 2005; Tong, Bishop, Enkelmann, Why, Diong, Ang, & Khader, 2006)。これまで、認知的評価スタイルに関する実証的検討は多くなされてきたが、これらの検討には大きく二つの点で偏りが見られる。第一に、これまでの研究は、認知的評価スタイルの中でも帰属スタイルに対象を限定したものが多かった。認知的評価スタイルが一般的な認知的評価の個人差に関する概念であるのに対し、帰属スタイルは事象の原因の推論という、より精緻な認知過程の個人差について限定した概念である。しかし、認知的評価には、事象が個人にとって害か益か、あるいは対処可能か否かといった、原因帰属以外の認知過程が含まれる。これらの認知過程の個人差については検討が不足している。第二に、認知的評価スタイルは、精神疾患との関連から研究されることが多かった (Arsenio & Lemerise, 2004)。そのため、扱われる感情が不安、怒り、抑うつなどネガティブなものに偏っており、ポジティブな感情や、自己意識的感情についての検討はなされてこなかった。以上のような研究状況を踏まえ、本研究では、より総合的、包括的に認知的評価スタイルを捉える測定法を開発する。

測定法の開発

これまで用いられてきた測定法は、感情に関するメタ認知を尋ねる尺度 (e. g. 私は怒りっぽい)、あるいは観察や実験の形式をとるものがほとんどであった。しかし、前者は、感情が一過性で動的な性質を持つことから妥当性に疑問が残る。一方、後者はコストが大きく、集団実施等には適さないという短所が挙げられる。そこで本研究では、状況的質問票 (Situational Questionnaire) 形式の測定ツールの開発を行う。状況的質問票は、提示された場面を想像して回答を行う形式である。メタ認知を必要としないことから、より実際の場面に近い認知的評価と喚起された感情を測定できると考えられる。また、質問紙形式であるため集団実施が可能である。

本研究では、第一に、測定ツールに使用する場面の作成と選定を行う。第二に、各場面における典型的な認知的評価の抽出、第三に、測定ツールにおける設問の方法について検討を行う。最後に、これらの結果を総合し、測定ツールの構成を行う。

方 法

対象者

国立大学の大学生および聴講生 64 名 (男性 13 名, 女性 51 名) であった。平均年齢は、26.50 歳

(SD=11.0)であった。

実施時期

2007年7月であった。

質問紙の構成

フェイスシートにおいて、年齢、性別を尋ねた。

短い文章による場面を10提示し、場面ごとに2つの質問に回答を求めた。質問1は、感情喚起について尋ねる「この状況で、あなたはどんな感情を抱きますか？」という質問であった。回答に際して、登場人物への評価(e.g. 怪しい人だ)や行動(e.g. 逃げようと思う)ではなく、感情について記入するよう強調した。質問2は、認知的評価を尋ねる、「そのような感情を抱くのは、なぜですか？」であった。回答形式は自由記述であった。

提示した場面は、以下の手続きにより作成した。Aldrich & Tenenbaum (2006), Root & Jenkins (2005), Gomez, Gomez, De Mello, & Tallent (2001), Lawson, Banerjee, & Field (2007) で使用された日常的エピソード、および P-F スタディ (Rosenzweig, 1987) を参考に、30の場面を作成した(表1)。作成に際して、喚起される感情に個人差が出やすいように、状況や相手の意図があいまいな場面となるように意図した。また、より多くの感情が喚起されるよう、ネガティブ、ニュートラル、ポジティブ、それぞれのタイプの場면을用意した。なお、場面作成は、調査者と研究協力者の2名で行われた。回答者の負担を考慮し、30の場面の中からランダムに10場面を組み合わせて1セットとし、質問紙を構成した。

表1 提示したエピソード

場面	
1	あなたとHさんは友達です。Hさんに授業のノートを貸してくれるように頼まれて、あなたはノートを貸してあげました。しかし、何日か経ってもノートは返ってきません。レポートを書くためにそのノートが必要になったあなたはHさんに連絡しましたが、1日経っても返事がありません。
2	あなたは図書館で本を読んでいた。ふと気がつくと、向こうの方に座った2人連れの人たちが、こちらを見ながら話しています。
3	あなたはKさんと待ち合わせをしていましたが、当日ひどい嵐でした。待ち合わせの時間を10分過ぎても、Kさんがやってきました。
4	あなたとTさんはベアになり、卓球の試合をしました。相手のチームに負けてしまいました。するとTさんが、「自分があんな失敗をしなかったら、勝っていたのに。すいません」と、謝りました。
5	あなたとNさんは、仲の良い友達です。ある試験のために、一緒に勉強していました。しかし、試験にはNさんだけが合格し、あなたは不合格になってしまいました。
6	あなたは、明日Gさんと会う約束をしています。Gさんから、待ち合わせの場所と時間を3日前までに連絡すると言われていましたが、前日の夜になってもまだ連絡がありません。
7	高校時代の親友であるFさんに久しぶりにメールをすると、あなたが教えてもらっていたメールアドレスが使えなくなっていました。
8	あなたがよく一緒に過ごしている友達グループの集まる飲み会が、近々あるようです。しかし、その日が迫っても、なぜかあなたにだけ誘いがありません。
9	あなたは店のレジに並んでいます。あなたの番になるまで少し間があると思って、レジの横にある商品を手にとって見ていました。ふと気がつくと、さっきまでいなかった人があなたの前に並んでいます。
10	あなたはHさんと2人で、車に乗って買い物にやってきました。買い物が終わって車に乗り込もうとすると、「鍵がない」とHさんが言い出しました。
11	あなたは先輩に論文の書き方を教わっています。作文の宿題を出され一生懸命書いていくと、「一年下の子の方が、よく書ける」と言われました。
12	雨が降りそうだったので、あなたは傘を持って来ました。講義の間、傘立てに立てておきましたが、いざ帰ろうとすると、自分の傘がありません。かわりに、別の傘が一本残っていました。
13	あなたはさいふを失くしてしまいました。さっきまで遊んでいたIさんの家に忘れてきたのではないかと思い、尋ねてみましたが、Iさんは全く知らないと言いました。
14	あなたはとても愛着のあるシャーペンを持っています。授業のとき、そのシャーペンを友達に貸したところ、壊れて使えなくなりました。

ネガティブ

ニュー ト ラ ル	15	あなたは食堂でお昼ごはんを食べていました。ふと顔をあげると、一度授業で隣に座ったことのある人がじっとこちらを見えています。
	16	あなたが廊下の角を曲がったところ、向こうから走ってきた人にぶつかり、こけてしまいました。その人が「大丈夫ですか」と声をかけてきました。
	17	あなたは友達と一緒に食堂に並んでいました。前にいた友達と同じものを注文すると、「それはさっきので売り切れです」と言われました。
	18	あなたは次の授業の教室へ向かっています。一度だけ話したことがある同じ学部のSさんが、前の方を歩いています。Sさんは教室のドアを開け、振り向いてあなたに気づくと、あなたが来るまで5秒あまりの間ドアを開けて待っていてくれました。
	19	連休を利用して旅行にやってきました。最終日、帰りの電車を待っているとき、近くに知り合いが住んでいたのを思い出して軽い気持ちでメールしてみると、「見送りに行きたいから待っていて」と返信が来ました。
	20	ある日Aさんが「これすごくおもしろいから」と言って、Aさんのお気に入りの漫画を全巻貸してくれました。
	21	あなたは英語の授業で突然あてられ、5分間英語でスピーチをしました。あまりうまく語せませんでした。その授業の後、英語がとて得意なクラスメイトのHさんが「上手だったね」と声をかけてきました。
	22	あなたはあるサークルに初めて参加しました。そのサークルのメンバーに、一度だけ話したことのあるYさんがいました。Yさんはあなたに気づくと、あなたのことを「とても明るくて優しく素敵なんです」と他のメンバーに紹介しました。
	23	あなたは、ある先輩にどうしても頼みごとをしなくてはいけなくなりました。あなたが勇気を出して頼んでみると、その先輩は少し面倒くさそうに「いいよ」と言いました。
	24	友達が自分の家へやってきたので、あなたはお気に入りのグラスで飲み物を出しました。すると、友達が手を滑らせてグラスを割ってしまいました。友達に怪我はありませんでした。
ボ ジ テ イ ブ	25	実家に住む友達の家に遊びに行ったところ、友達のお母さんが食事を出してくれました。しかし、あなたは1時間前に食事をしたばかりでした。
	26	あなたは大切なものを失くしてしまい、一生懸命探していました。そこへ、向こうから友達が走ってやってきました。
	27	あなたは数学の宿題を解いています。苦勞してあと一息というところまできましたが、どうしても最後の答えが分からず悩んでいるところに、友達がやってきて答えを言いました。
	28	あなたはEさんが苦手です。ある日、Eさんに飲み会に誘われました。
	29	あなたは家庭教師のアルバイトにやってきましたが、とても空腹です。そこへおやつが出てきました。しかし、それはあなたの好きでないお菓子でした。
	30	あなたはソフトボール大会に出場することになり、いい機会だと思ってジャージを新調しました。大会当日、あなたの決死のスライディングがチームを勝利に導きましたが、ジャージは破れてしまいました。

結 果

場面の選定

各場面の質問1において、相手に対する評価や行動の計画について言及したものを除き、感情について言及したもののみを検討の対象とした。各場面で喚起された主な感情を表2に示す。

表2 各場面において喚起された感情

1	怒り	不安	困惑	後悔	焦り	16	怒り	喜び	罪悪感	恥	驚き
2	困惑	不安	恐怖	怒り	恥	17	怒り	落胆	悲しみ	困惑	
3	怒り	不安	焦り			18	喜び	罪悪感			
4	喜び	罪悪感	不安	驚き		19	喜び	怒り	罪悪感	困惑	不安
5	悲しみ	喜び	羨望			20	喜び	期待	不安	感謝	怒り
6	怒り	不安				21	喜び	怒り	恥	感謝	落胆
7	怒り	恥	悲しみ	不安		22	喜び	恥	不安	怒り	
8	悲しみ	不安	焦り	落胆		23	喜び	罪悪感	喜び	不安	
9	怒り	嫌悪	不安	驚き		24	喜び	怒り	悲しみ		
10	怒り	不安	困惑	驚き	焦り	25	喜び	罪悪感	不安		
11	怒り	悲しみ	恥	落胆	絶望	26	喜び	恥	困惑	期待	
12	怒り	困惑	嫌悪	悲しみ	葛藤	27	喜び	怒り	困惑		
13	怒り	焦り	不安	困惑	絶望	28	不安	恐怖	困惑	嫌悪	
14	怒り	驚き	悲しみ	後悔	困惑	29	喜び	不快	困惑		
15	不安	喜び	困惑	恥	焦り	30	喜び	悲しみ	誇り	落胆	

この結果をもとに、①喚起される感情に個人差が大きい、②組み合わせた際により多くの種類の感情について測定できる、の2つの基準に基づいて場面を選定した。場面数は回答者の負担を考慮して12とした(表1: 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 21, 22, 23, 26, 28)。選定された場面によって喚起される感情は、怒り、悲しみ、不安、喜び、恥、罪悪感の6つであった。

各感情に対応する典型的な認知的評価の抽出

質問2の結果から、選定された場面ごとに典型的な認知的評価を抽出した。その際、Lazarus (1991)の中心的関係テーマに基づいた認知的評価となるよう留意した。各感情の中心的関係テーマを表3に示す。また、抽出された認知的評価を表4示す。

表3 中心的関係テーマ (Lazarus, 1991より抜粋)

感情	中心的関係テーマ
怒り	自己をおとしめる攻撃
悲しみ	取り返しのつかない喪失を経験
不安	不確実な脅威に直面
喜び	目標実現に向けて進歩
恥	理想自己にそぐわない行動をした
罪悪感	道徳的義務からの逸脱

表4 抽出された認知的評価

場面の概要	感情	認知的評価
10 連れの人が鍵を失くす	怒り	なぜ相手はきちんと鍵を持っておかなかったのか
	悲しみ	鍵が二度と見つからないかもしれない
	不安	鍵が誰かに悪用されるかもしれない
11 年下の人よりもだめだと言われる	悲しみ	自分には能力がない
	恥	自分の能力の低さを、先輩に知られてしまった
	怒り	そんな言い方をしなくてもいいのに
12 傘立ての傘が紛失する	悲しみ	努力したのに、それが無駄になった
	喜び	ちょうど代わりの傘があり、それを使おう
	怒り	誰かが自分の傘を盗った
13 財布が紛失し、疑わしい人物が存在する	なし	誰かがうっかり間違えて持っていったのだろう
	怒り	もつとちゃんと探してくれたらいいのに
	悲しみ	財布が二度と見つからないかもしれない
	不安	財布が誰かに盗られてしまったのではないか
14 友人に貸したものが壊れる	怒り	相手が嘘をついているのではないか
	悲しみ	大切にしていたものを失った
	なし	壊れたのは仕方ない
15 半見知りの人が見ている	不安	自分におかしなところがあるのではないか
	喜び	自分のことを覚えていてくれた
	喜び	その人と友人になるチャンスかもしれない
16 廊下で人にぶつかって転ぶが、謝罪される	怒り	何か言いたいことがあるなら、言えばいいのに
	怒り	もっと気をつけてほしい
	喜び	相手が自分のことを気づかってきている
	恥	自分がこけたところを見られてしまった
	罪悪感	自分も不注意だったかもしれない

21 失敗したにも関わらず褒められる	喜び	自分の能力が認められた
	怒り	バカにされているのではないか
	喜び	相手が自分を気づかってくれている
	恥	自分の能力の低さを、他人に知られてしまった
22 半見知りの人に褒められる	喜び	自分のことを良く思ってくれている
	喜び	紹介のおかげで、今後うまくやっていけそうだ
	恥	実際以上に良く言われてしまった
	怒り	1度しか話したことがないのに、なぜよく分かっているような言い方をするのだろう
23 相手が自分の頼みごとを嫌な顔をしながら引き受ける	喜び	頼みごとを聞いてもらえて、助かった
	怒り	面倒くさそうに返事をするのではないのに
	罪悪感	先輩に迷惑をかけてしまったのではないか
	悲しみ	相手に嫌な印象を持たれてしまったのではないか
	不安	頼みごとをきちんとやってくれるだろうか
26 探し物をしているところに友人がやってくる	喜び	一緒に探してもらえる
	怒り	探し物をしているのに、その邪魔をされる
	喜び	探している物を持ってきてくれたのかもしれない
	喜び	自分に好意を持ってきている
28 苦手な人物に誘いを受ける	喜び	仲良くなるチャンスだ
	不安	行っても楽しくないのではないか
	不安	何か裏があるのではないか
	怒り	わざわざ誘わなくていいのに

考 察

予備調査の目的は、感情喚起の個人差および認知的評価スタイルを測定できるツールを作成することであった。予備調査で得られた自由記述から、喚起される感情に個人差があらわれやすく、より多くの種類の感情が測定できる12場面の選定を行った。また、各場面に合った認知的評価を中心的関係テーマに沿って抽出した。以下、結果に基づいて測定ツールの作成を行う。

場面は、予備調査の際に得られた意見を参考に一部表現の修正を行った。提示順序は、ネガティブ、ニュートラル、ポジティブな場면을ランダムに並べ替える。

場面ごとに以下の2つの質問を設ける。質問1は感情喚起について尋ねるもので、「この状況で、あなたはどのような感情を抱きますか？」とし、「怒る」、「悲しむ」、「不安になる」、「喜ぶ」、「恥ずかしい」、「罪悪感（申し訳ない）」の6つの感情を提示する。回答は、強く感じるものに○、少し感じるものに△をつけるよう教示する。○、△共に複数回答可、感情を感じない場合には無回答でも良いこととする。統計的処理を行う際には、○を3点、△を2点、選択されなかったものに1点を与える。3件法で尋ねることを避けたのは、いくつかの選択肢の中から感覚的に選択を行ってもらうことによって、より実際の感情経験に近い測定結果を得ることができると考えたためである。

質問2では、認知的評価について尋ねる。表4に示した認知的評価について、「思った」「少し思った」「思わなかった」から選択するよう教示する。統計的処理を行う際には、「思った」に3点、「少し思った」に2点、「思わなかった」に1点を与えることとする。測定ツールの例を図1に示す。

■以下のエピソードを読んで、1、2の問いにお答えください。

あなたはHさんと2人で、
車に乗って買い物にやってきました。

買い物が終わって車に乗り込もうとすると、
「鍵がない」とHさんが言い出しました。

1. この状況で、あなたはどのような感情を抱きますか？
強く感じるものに○、少し感じるものに△をつけてください。
 ※ ○と△はいくつつけてもかまいません。また、どれも感じないときには、○や△をつけなくてもかまいません。

怒る 悲しむ 不安になる

うれしい 恥ずかしい 罪悪感（申し訳ない）

2. そのとき、どのようなことを思いましたか？
 以下の文を読んで、**あてはまる選択肢（思った・少し思った・思わなかった）に○を**
つけてください。

(1) なぜHさんは、きちんと鍵を持っておかなかったのかと・・・ { 思った
 少し思った
 思わなかった

(2) 鍵が二度と見つからないかもしれないと・・・・・・・・・・・・ { 思った
 少し思った
 思わなかった

(3) 鍵が誰かに悪用されるかもしれないと・・・・・・・・・・・・ { 思った
 少し思った
 思わなかった

図 1 測定ツールの例

調査の結果から、12 場面から成る測定ツールが作成された。この測定ツールは、感情喚起および認知的評価の個人差を、怒り、悲しみ、不安、喜び、恥、罪悪感の6つの感情について同時に測定する新しい試みである。また、これまでの感情喚起の個人差についての研究で用いられてきた観察法よりも簡便であることや、自己の感情喚起の傾向に対する認知を尋ねる従来の尺度よりも、より日常の認知的評価や感情喚起の個人差に近いものを測定していることから、今後の感情喚起研究への貢献可能性も大きい。今後、信頼性、妥当性の確認を行い、ツールの機能向上を行う必要がある。また、この測定ツールに用いられた場面の中には、大学生以外の回答者には想像しにくいものが存在するため、大学生以外の集団に実施する際には、表現を改める必要がある。表現を改めた後の信頼性、妥当性確認も併せて行っていく必要がある。

今後は、幼児とその母親を対象に、母親の認知的評価スタイルが子の感情喚起の個人差形成に与える影響とそのメカニズムについて実証的検討を行う。母親の認知的評価スタイルおよび感情喚起の個人差は、本研究において開発した測定ツールの表現を一部改めて使用する。子（幼児）の感情喚起の個人差については、観察、実験、母親・教師への調査等、複数の情報源によるアセスメントを行う予定である。

引用文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. (1978). Learned Helplessness in Humans: Critique and Reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49-74.
- Aldrich, N. J., & Tenenbaum, H. R. (2006). Sadness, anger, and frustration: Gendered patterns in early adolescents' and their parents' emotion talk. *Sex Roles*, **55**, 775-785.
- Arnold, M. B. (1960). *Emotion and Personality: Vol.1. Psychological Aspects*. New York: Columbia University Press.
- Arsenio, W. F., & Lemerise, E. A. (2004). Aggression and moral development: Integrating social information processing and moral domain models. *Child Development*, **75**, 987-1002.
- Friedrickson, B. L. (2005). Positive Emotion. HANDBOOK OF POSITIVE PSYCHOLOGY. (pp.120-134). Snyder, C. R., & Lopez, S. J.(ed.). Oxford University Press: New York.
- Gomez, R., Gomez, A., De Mello, L., & Tallent, R. (2001). Perceived maternal control and support: Effects on hostile biased social information processing and aggression among clinic-referred children with high aggression. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **42**, 513-522.
- 速水敏彦・丹羽智美. (2002). 子どもたちの感情はどのように変化したかー教師の目からみた特徴一. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学*, **49**, 197-206.
- 厚生労働省統計情報部. (2005). 平成 17 年度患者統計. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/10-17.html>.
- Lawson, J., Banerjee, R., & Field, A. P. (2007). The effects of verbal information on children's fear beliefs about social situations. *Behavior Research and Therapy*, **45**, 21-37.
- Lazarus, R. S. (1991). *Emotion and Adaptation*, New York: Oxford University Press.
- Lazarus, R. S. (1993). From Psychological stress to emotions: A history of changing outlooks. *Annual Review of Psychology*, **44**, 1-21.
- Reisenzein, R., & Hofmann, T. (1990). An investigation of dimensions of cognitive appraisal in emotion using the repertory grid technique. *Motivation and Emotion*, **14**, 1-26.
- Root, C. A., & Jenkins, J. M. (2005). Maternal Appraisal Styles, Family Risk Status and Anger Biases of Children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **33** 193-204.
- Roseman, I. J. (1991). Appraisal determinants of discrete emotions. *Cognition & Emotion*, **5**,

161-200.

- Roseman, I. J., Dhawan, N., Rettke, S. I., Naidu, R. J., & Thapa, K. (1995). Cultural differences and cross-cultural similarities in appraisals and emotional responses. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **26**, 23-48.
- Roseman, I. J. & Smith, G. A. (2001). Appraisal Theory: Overview, Assumption, Varieties, Controversies. *Appraisal processes in emotion: theory, methods, research* (pp.3-19). Scherer, K. R., Schorr, A., & Johnstone, T.(ed.). Oxford : Oxford University Press.
- Rosenzweig, S. (1987). *P-F スタディ解説—1987年度版—成人用・児童用・青年用* (林 勝造, 訳). 京都 : 三京房.
- 斉藤卓弥. (2007). 各論うつ病—子どもを蝕む大人の病氣—. *小児科*, **48**, 769-744. 東京 : 金原出版.
- Scherer, K. R. (1999). On the Sequential Nature of Appraisal Processes: Indirect Evidence from a Recognition Task. *Cognition & Emotion*, **13**, 763-793.
- Scherer, K. R., Schorr, A., & Johnstone, T. (2001). *Appraisal processes in emotion: theory, methods, research*. Oxford : Oxford University Press.
- Smith, C. A., & Lazarus, R. S. (1993). Appraisal components, core relational themes, and the emotions. *Cognition & Emotion*, **7**, 233-269.
- Tong, E. M. W., Bishop, G. D., Enkelmann, H. C., Why, Y. P., Diong, S. M. Khader, M. & Ang, J. (2007). Emotion and Appraisal: A study using ecological momentary assessment. *Cognition & Emotion*, **21**, 1361-1381.
- van Dijk, W. W. & Zeelenberg, M. (2002). Investigating the Appraisal Patterns of Regret and Disappointment. *Motivation and Emotion*, **26**, 321-331.